資料

佐伯と国木田独歩（二）

——その死後——

会員　山本　保

佐伯市中川辺水銀町、有馬　尚先生へ元佐伯鶴城高校教諭、七十才）より、次のような書状が届きました。

「突然、書状を以って御免蒙ります。失礼御許し下さい。――――――――

はからずも、小生若い時、山口県柳井市に蔵を持ち十年足らず過ごしましたが、今日、その時の後輩から ローカル紙周南新報を赤線引きで一部を送って来ました、遠子哲二氏の講演。速記録ながら独歩に劣らぬ才筆と見たので、その謙虚な人柄にひとり感じ入りました。

従来も再々この種の記事を送って来ましたが、一読して散逸しました。

佐伯史談を愛読する余り、一興を催して御送りします。――――――――

昭和四十六年六月二十三日　　再拝。」

有馬　尚先生からいただいた新聞記事の一部を掲載させていただきます。

"わが父独歩を語る"

文豪独歩の生誕百年を記念する独歩忌俳句、短歌会で独歩の遺兒、佐土哲二氏が「わが父独歩を語る」と記念講演した要旨はつぎのとおり。

有名人を持つ子の悩み。

本日は父独歩を記念する会に、おおついところ、皆様お集まり下さいまして、遺族の一人として心からお礼を申し上げます。こちらの会は、公民館の御尽力で全国にもない二十二年も続けられ、誠に深く感謝致します。

尚、このような会に御招きを受けた私は、大変光栄な次第に思っております。私はまことに口不調法で、こうした場所でお話しする位全く苦が手なのです。今でも、父に関する方々の催しには、母と共に伺い、話し方は、常ら母に押しつけております。

然しその母もなくなり、姉も遠くへの旅行は出来ず、とうとう私一人が参った次第であります。父独歩に就き、何か話しきとの御注文なのですが、何分私は父の死後、初七日の日、父と入れかわりで生まれたので、父の事は何も知らないのです。也も父に関しては、作品、生涯すべて、皆様の熱心なる研究が尽くされ、私などが父の事をとやかく申し上げるのは全くおこがましい事と思います。

そこで、こうした席の話しとしては、ちと場ちがいと思いますが、有名な父を持った子供たち、そして又、有名な夫を若くして失った妻のその後の暮しの辛さというようなものを、自分を中心にしてお話ししたいと思います。

父は三十八才で亡くなり、母は二十九才で、八才をかしらに乳のみ兒きいれて四人が残されました。父はいつて見れば、短距離選手みたいなもので、短い一生にいろんな事を全力をあげてやりたい放題にやったよ

うです。然し文学以外のすべて所期の目的を達せず、中途で死んでしまいました。

「遺産」どころか借金だらけ、そして、残した文章は量も少なく、それに今程著作権などの確立していなかった時代ですから、母は子供達をかかえ、さぞ大変だったろうと思います。友人、先輩方からも援助もありましたが長続きはしません。母は一応文才もあり、生前はいろいろ父の手助けをしたくらいなので、死後は平塚らいちょうさん達と青鞜社を興し、一緒に活動していたようですが、矢張り暮しは立ちません。

そこで、母は一番小さい私を里子に出し、東京の三越百貨店の女店員監督に就職して、暮しを立てるようになりました。職業婦人の珍らしい時代、それは余程忙しくない明治、大正の頃ですから、まだ若い小説家の未亡人を黙って見ていません。母は随分それに堪えていたようです。世間では文豪の未亡人といわれますが、母にしては只の若いやもめに過ぎません。年月がたてば父への恩慕も薄らぎ、矢張り、どこかへ天下晴れて再婚したかったのではないかと思われます。

然し、世間はひとの頭痛は、三年でも我慢するというように、有名人の妻であれば、その夫が有名であればある程、残された妻に貞節を要求するようです。

そして、ちょいとでも浮いた噂が立てば、その真偽もたしかめず、寄ってたかって袋だたきにしてしまいます。

母は、じっとそれを我慢して、文豪の未亡人というタイトルを背負って、十年前に八十三才で亡くなりました。一番上の姉は声楽家を夢見ながら、父と同じく神奈川県茅ヶ崎南湖院で胸をわずらい死にました。兄虎雄は詩人として世に出ました。次の姉は、全く真面目な人間で固く身を持して、ちょっとでも父の名をきずつけまいとコツコツと努力し、母の一生の面倒を見ながら教職に身を捧げております。

私は母の生活難で、赤ん坊の時から、方々の家へ転々と里子に出され、やっと五才の時、今の佐土と云う家へ養子として落ちつきました。方々の家で育ったので、どれがほんとうの親か判らず、幼なかったので、最後の家がほんとうの親と思い込んでおりました。

でも、世間の人というのは無責任なもので、小学校三年の頃、隣りの人に「お前の親は、国木田と云う人なのだよ」と教えられました。半信半疑ながら随分ショックをうけました。然し、子供なりの知恵で、何度わぬ振りをしてじっと我慢しておりました。今考えると、随分ませた、気味の悪い、いやな子だと思います。

それから、国木田と云うのは何だろうと、折りにふれ研究し、小学校を卒業する頃は、ほんとうの親は相当偉いらしいと判り、隣近所の子たちとは違うんだぞなどと、変に気負っていたもんです。全くお恥ずかしい事です。

中学に入り、美術学校で彫刻の研究をしました。……

父は、別にひどく勉強したと云う事は聞きません。大した苦学もなく、あの仕事があとからあとから生まれ出たのだと思います。云ってみれば、天才の部類に入る人ではないでしょうか。自分の内容が、父の芸術に太刀打ちが出来ない事は判っていても、わりかけた彫刻を止めるわけにはいきません。負け目を感じつつ「イマニコソ、イマニコソ」と思いながら続けました。世に知られた者を父に持つと云うのは辛いものです。

丁度その頃（昭和十年前後）、他からの影響もあつ

て右翼へと傾き出し、そのうち、ひよん女機会があつて橋本欽五郎大佐の肖像を頼まれた時、すつかりその思想に魅せられ、彫刻を続けながらも橋本さんの傘下に入り、愛国青年運動にはげみました。これも棄てがたえせば、父に負けまい、父のやらなかつた部分をやるんだと云う心理が作用したのだと思います。

妻ふきはつたらかして、開戦前から北支へ、開戦と同時にジャワに渡り、軍の走狗となつて走りまわりました。

終戦後一年たつて、やつと日本に帰りました。昔の後援者から招かれたのを渡りに舟とその会社に入り、ついうかうかと二十年を過ごしてしまいました。父へのコンプレックスも義学と共に消え、年も喰ふたせいか、そうムキに父を意識することもなくなりました。

でも、雀百までと申す通り、昔の性根が残つていたせいか、丈夫なうちは又、物を作つて暮らす生活にもどり、たまたま傍年の年令になつたのをもつけの幸いと、会社を強引にやめ、今は最初から出直しで金工をやつております。

自分たちの無能を棚に上げ、父のせいにしたりして、まことにお恥かしい話でした。

でも、とに角、能力のとぼしい者が、才能にめぐまれた親を持つということは、当人どもには辛いものです。名人に二代なしと云う諺がありますが、全くよく判る気がいたします。でも独歩き父に持つたのは、全然損だつたかといいますと、損だつたと云えば嘘になります。たまには得なこともありました。

第一、姉の子供や、私の子供たちは、祖父が天分に恵まれた人間だつたので、自分たちも努力によつては何とかなると云う自信を持ち、それに幸い、姓が違うので世間からは好奇の目で見られる事もなく、それぞれ一生懸命に各々の仕事にはげんで居ります。

まことに、今日の会には、ふさわしくない私事を、長々とおしやべりした事をお詫び致します。

（備考）

(1) 年譜・その他

独歩

- 貞（長女）―病没　声楽家を夢見ながら
- 虎雄（長男）―詩人
- 文どり（次女）―教員
- 哲二（次男）―彫刻家

（振子）治

明治三十一年（二十八才）　振子治（十九才）と結婚した。
三十二年（二十九才）　長女貞が生まれる。
三十九年（三十二才）　長男虎雄出生。
三十七年（三十四才）　次女文どり出生。
四十一年（三十八才）　独歩逝去。次男哲二出生。
時に妻治二十九才、長女貞十才、長男虎雄七才、次女文どり五才、次男哲二は初七日に生まれた。

四人の子どもをかかえた若き未亡人治さんの心境は想像するに余りあります。明治時代の女性には頭が下がります。

現代の女性の在り方とは、非常な相違があるように思われます。

(2) 独歩碑など

独歩の記念碑は、佐伯城山の外に、武蔵町市に二基、三鷹市に一基、神奈川溝の口に一基、茅ヶ崎市に一基

湯河原に一基、銚子市に一基、都井市に二基、山口市に一基、北海道室蘭市に一基あり、墓碑は東京都青山墓地にあります。

特に中央線三鷹駅場にある独歩碑には、「山林に自由存す」という文字がきざみこまれ、肖像（銅版）もはめこまれています。

独歩は武蔵野のクリやナラの林を愛し、暇があれば三鷹市、玉川上水付近をよく散歩しました。「武蔵野を散歩する人は、道を苦にしてはいけない。！！！！！！！！！！」と口ぐせのようにいわれていたそうです。

武蔵野の自然は、近年失なわれてきましたが、小平市付近は、いまも田園風景がみられ、散策する人が多いといわれています。

明治三十四年（三十一才）に発表された作品「武蔵野」は、明治文学の最高傑作のひとつとして、関東地方西部にひろがる武蔵野の自然の美しさを、心ゆくまで描き出しています。

故郷千葉県銚子市の詩碑には、「なつかしき、わが故郷は、何処でや。彼処におれば、山林の児なりき。」――山林に自由存す――の独歩の詩がきざまれています。

山口県岩国市の初代市長だった永田新之允氏のご自慢の一つは、独歩と岩国の地ですごし、小学生時代、市を並べたことでした。永田老が誇りとするように、独歩は一流の人でした。

独歩が病没した当時、新聞、雑誌は、「文豪」というコトバを公然と使用しました。文豪とか、大家とかいう表現を濫用すると、むしろ、濫誓な感じを与えるものですが、独歩の場合、このコトバが自然に聞こえるほど、偉大な作家でした。

然し、生前の独歩は、必ずしも、恵まれた詩人でも作家でもなく、明治の日本にひたすら生きて、数奇に富んだ生涯を終わりましたが、家族の人たちは、独歩の生前、死後を通じて、非常な辛酸をなめたものと推測されます。

（おわり）

佐伯史談会と郡部ところどころ

（つづき）

○鶴見町

羽出浦の安部氏が、八十才を超す高令ながら、毋念に郷土に残る古文書を追求されていることは、そして「佐伯史談」に毎号それを紹介なさっていることは、敬服にたえない。

鶴見町にも文化財保護条例ができ、調査委員の任命もおつたという。道路もその開通が半島先端部に向つて伸んでいる。意外なものが出て来るにちがいない。

わが史談会が、鶴見埼の突端に立つことは、いつ実現出来ようか。もう二三年来の願望である。

○蒲江町

畑野浦には史談会が出来、その主な方々は佐伯史談会にも入会していて、活潑にやつている。

楠本には、旧藩の頃の記録文書が多数保存されていて小野会員によつて調査されている。村外れの山陰にある庚申塔は珍らしい。高さも一米を越す大きなもの、主神が女く三猿が大きく上部に刻んである。

蒲江では小野武夫氏（会員）が、病苦に耐えつつ町史編さんを目指して史料と取組んでいる。本会も積極的に資料を提供して協力することにしている。